夏目漱石『文学論』の修辞学
―Associationism（連合主義）を視座として―

木戸浦　豊和

はじめに

夏目漱石『文学論』（大倉書店、明治四〇年五月）はしばしば、「学術研究書でもなければ、文芸評論のジャンルにも属さない世にも奇怪な畸形児でしかない」[1]、「漱石にとって個人的な必然性はあったにしても、このような書物が書かれるべき必然性は日本には（西洋においても）なかったといわねばならない」[2]と述べられるように、日本や西洋の同時代的な文学状況から孤立した、極めて特異なテクストとして受け止められてきた。しかし『文学論』を何れの「ジャンルにも属さない」テクスト、「書かれるべき必然性」のないテクストとして共時的な文脈を全く無視して理解することは果たして妥当な態度と言えるだろうか。

『文学論』を巡っては従来から、漱石における心理学の受容の問題が研究の焦点の一つとなってきた。漱石自身が「序」の中で、「余は心理的に文学は如何なる必要あつて、この世に生れ、発達し、頽廃するかを極めんと誓へり。余は社会的に文学は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと誓へり」（9）、「余の文学論は十年計画にて企てられたる大事業の上、重に心理学社会学の方面より根本的に文学の活動力を論ずるが主意」（11）と述べているように、漱石は心理学の学説を文学の理論として援用しているのである。

漱石が『文学論』で直接に言及する心理学の理論は総じて一九世紀の半ば以降に興り、自然科学への志向を強く持つ「新心理学」と言える。[3]しかし、『文学論』「第四編　文学的内容の相互関係」の中で、「文芸上の真を発揮する幾多の手段の大部分は一種の「観念の聯想」を利用したるものに過ぎず」（262）と述べているように、漱石が参照する心理学の学説は新心理学に止まらない。「観念の聯想」とは、一九世紀半ば以降に興る新心理学に先立ち、一八世紀から一九世紀の西洋近代心理学において隆盛した「連合主義（Associationism）」、あるいは「連合主義心理学（Association Psycho-

logy）」と呼ばれる潮流において中心的に論じられた主題であるからである。

『文学論』と連合主義との関わりでは、心理学者の波多野完治[4]や英文学者の太田三郎[5]、同じく英文学者の塚本利明などによる指摘が既になされている。特に塚本の論考は、『文学論』第四編が西洋修辞学の影響下にあること、そして、その西洋修辞学は連合主義によって理論付けられていることを詳細に論じ、『文学論』の達成と限界とともに『文学論』が根差すコンテクストの一端を示している点で極めて興味深い。塚本は次のように指摘する。

> 第四編は「文芸上の真を伝ふる手段」としての表現論であるが、具体的には、「観念の連想」と「文芸的内容の価値的等級」といった二つの原理によって修辞学上の詞姿論を理論的に再構成したものである。この方法によって、漱石はヘイヴン、ベイン等の「通俗の修辞学」を超えることはできたが、漱石の二つの原理の基本にある発想法は、前者は連合心理学、後者は修辞学そのものの思考法の延長上にあるものである。ところが、ベインからの引用でもあきらかなように、修辞学は、心理学の成果を自己の中にとりいれることによって自己の理論的根拠を科学的に基礎づけようとする傾向をもっていた。（中略）このようにみれば、第四編で「観念の連想」という心理学の成果が利用されていること自体が、修辞学的発想の枠の中にあるものであり、第四編は、広義の修辞学的伝統の枠内にとどまっていると云わざるを得ない。[6]

本稿では『文学論』を「広義の修辞学的伝統の枠内にとどま」るものとする塚本の見解を受け、漱石の連合主義への関心を漱石文庫の蔵書への書き込みや筆記断片などの外在的な資料から具体的に明らかにするとともに、『文学論』と連合主義・修辞学との関連を考察することを通じて、『文学論』の同時代的な位相とその固有性について検討することとしたい。

一　漱石と連合主義

そもそも心や精神を連合主義的に捉える発想は、古代ギリシアにおけるアリストテレストや、中世においてアリストテレスの哲学を復興したトマス・アクィナスなどに見ることができる。しかし近代的な心理学における連合主義は、トマス・ホッブズ（Thomas Hobes, 1588-1679）、ジョン・ロック（John Locke, 1632-1704）、ジョージ・バークレー（George Berkeley, 1685-1753）、デイヴィッド・ヒューム（David Hume, 1711-1776）といったイギリス経験論を直接の源流とし、イギリスの医師・心理学者であるディヴィッド・ハートリー（David Hartley, 1705-1757）によって理論として体系化された。広義の連合主義に属する心理学者として、他に、ジェームズ・ミル（James Mill, 1773-1836）、ジョン・スチュアート・ミル（John Stuart, 1806-1873）、アレクサンダー・ベイン（Alexander Bain, 1818-1903）、ハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）などが挙げられる。

このような一八世紀から一九世紀にかけてイギリスを中心に発達した連合主義心理学の特徴について、『連合主義心理学の歴史（A

History of the Association Psychology)』(一九一〇)を著したアメリカの心理学者ハワード・ウォーレン(Howard C. Warren)は、次のように、記憶や想像、感覚などの「観念(ideas)」の発生とその結合、展開の法則を解明することを課題としたと指摘する。

The term *association*, as used by the English psychologists of the eighteenth and nineteenth centuries, applies primarily to the *sequences* that occur in trains of memory or imagination or thought: their problem was to formulate the principles involved in such sequences. Accoriding to the view generally adopted by these thinkers, one such experience follows another through certain definite relationships. Thus, one idea may serve to recall another which *resembles* it or which was contiguous to it in former experience. Here we have the narrowest view of association, conceived as the principle by which trains of ideas are induced. Starting with this fundamental conception, the scope of the principle has been broadened in various directions.(二)

また、アメリカの哲学者・心理学者のジェームズ・マーク・ボールドウィン(James Mark Baldwin, 1861-1934)が一九〇一年に編集した『哲学・心理学事典(Dictionary of Philosophy and Psychology)』では、イギリスの心理学者ジョージ・スタウト(George Frederick Stout, 1860-1940)は、"Association (of ideas)"について次のように定義する。

A union more or less complete formed in and by the course between the mental dispositions corresponding to two or more distinguishable contents of consciousness, amd of such a nature that when one content recurs, the other content tends in some manner or degree to recure also.(三)

このように連合主義とは、ある観念が生じると、続いて別の観念が引き起こされるという心的な現象の要因とその法則を探究することに目的があった。漱石がこのような連合主義に対し大きな関心を寄せていたことは、蔵書の書き込みから具体的に跡付けることができる。例えば漱石は、西洋近代哲学を概説した『近代哲学の発展(The Growth of Modern Philosophy)』(一九〇九)という書物の中でロックによってはじめて「観念の連合(Association of Ideas)」の概念がもたらされたと指摘する記述や、イギリス経験論を中心に「観念の連合」が概説されている箇所に対して次のように下線を引き関心を示している。

The works of Locke that is most important for phylosophy is the "Essay concerning Human Understanding", written about 1687 and published about 1689. There were many editions of this book, introducing revisions and additions; and apprently, in the sixth edition, the chapter on the Association of Ideas was introduced in this way.(三)

If, then, we wish to explain experience we must begin with its simplest elemnents. The first data of experience are first of all sensations, which are run together to make complex ideas, such as that of substance. With this crude description is connected the first reasoned account of the association of ideas ("Human Understanding," ii.32). It is here also that Locke makes the famous distinction between primary qualities, or those which are perceived by more than one sense (e.g. extionsion), and secondry qualities, such as color. Primary qualities are said to belong to objects, and secondry qualities are caused by the action of the percipient.[10]

さらに漱石は、ヴント『心理学概論（Outlines of Psychology）』（英訳一九〇二、原著一八九六）の中で、近年の心理学の発達によって連合主義心理学における連合の意味に根本的な変化が生じたと論じる一節に対し、特に連合主義心理学の創始者としてのハートリーに下線を引き注目している。

The concept association has undergone, in the modern development of psychology, a necessary and very radical change in meaning. To be sure, this change has not been accepted everywhere, and the original meaning is still retained, especially by those psychologists who support, even to-day, the fundmental positions on which the association-psychology grew up. Asoosiation-psychology which is predominantly intellectualisric pays attention to nothing but the *ideational contents* of consciousness and, accordingly, limits the concept of association to the combinations of ideas. HARTLEY and HUME, the two founders of association-psychology, spoke of "association of ideas" in this limited sence.[11]

この一節においてヴントが、心理学の発達によって連合の意味に大きな変更が生じたと述べていることからも推測されるように、一九世紀半ば以降に興った、自然科学を志向する新心理学は、一八世紀から一九世紀にかけて西洋心理学のパラダイムの一つを築いた連合主義心理学に対する否定、あるいはその批判的継承という側面を強く持っているように思われる。このような連合主義心理学に対する新心理学の態度は、漱石が受容した心理学者の著作の中に他にも具体的に見出すことができる。

例えば、漱石の作品や文学理論との関連で「意識の流れ（The Stream of Thought）」説が言及されることの多い、ウィリアム・ジェームズ『心理学原理（The Principles of Psychology）』は、序文で、「この書物は結果として連合主義者と精神主義者の理論に反論することになる（This book consequently rejects both the associationist and the spritualist theories）」と述べ、さらに「第一四章　連合（Association）」では、連合主義者による「観念の連合」という発想自体を批判し、対象相互の結び付きが継起的に生じるの

は、大脳による生理現象の働きとして捉えている。[12] また、リボー『創造的想像力に関する試論(Essays on the Creative Imagination)』(一九〇六)においても、連合を「観念の連合」にのみ限定すべきではなく、知性や情緒、意識にまで拡張して理解すべきであると述べ、さらに連合の基本的な法則を巡っては未だ見解が分かれていることを示している。[13]

このように一九世紀半ば以降に展開しつつあった新しい心理学においても、否定的に言及するにせよ、あるいは批判的に継承するにせよ、連合は心理学の重要な課題として論じられ続けていたのであり、漱石がこの旧い理論と出会ったのも、ブントやジェームズ、リボーをはじめとする新しい心理学の担い手たちの学説を一つの契機としていたと考えられるのである。[14]

それでは、漱石は連合主義のどのような点に関心を向け、その理論を文学の理論としてどのように応用しようとしていたのだろうか。

二　「観念の連合」の法則への関心

「アリストテレス以降、はじめて連合の方式を十全に分類しようと試みた(the first after Aristole to attempt a through classification of the modes of association)」[15]とされるデイヴィッド・ヒュームによれば、観念の連合の法則は、「類似(resemblance)」、「時間または空間における隣接(contiguity in time or place)」、「原因結果(cause or effect)」の三つの原理に分類されるという。ヒュームは次のように主張する。

> Though it be too obvious to escape observation, that different ideas are connected together; I do not find, that any philosopher has attempted to enumerate or class all the principles of association; a subject, however, that seems worthy of curiosity. To me, there appear to be only three principles of connexion among ideas, namely *Resemblance, Contiguity* in time or place and *Cause* or *Effect*.
>
> That these principles serve to connect ideas will not, I belive, be much doubted. A picture naturally leads our thoughts to the original; The mention of one apartment in a building naturally introduces an enquiry or discourse concerning the others; And if we think of a wound, we can scarcely forbear reflecting on the pain which follows it.[16]

ヒュームの例では、絵と実物を結び付けるのが「類似」の原理であり、ある部屋が他の部屋をも連想させるのが「隣接」の働きであり、傷が痛みを想起させるのが「因果」の作用であるとされる。またヒュームによれば、「対照(Contrast)」もまた観念を結び付ける役割を果たすが、しかし「対照」は観念の連合の法則の一つとして独立した原理であるのではなく、「因果」と「類似」との組み合わせとして捉えられている。

ヒュームはこのように観念の連合の法則として三つの原理を提示したが、先にもジェームズやリボーにおいて見られたように、後の

心理学などの展開の中で連合の原理を巡って異なる見解が示される場合がある。

例えば、一九世紀末における西洋の文学や芸術を「世紀末的」な退廃現象の現れとして論難したドイツの評論家マックス・ノルダウの著作『退化論（Degeneration）』（原著一八九二、英訳一八九八）の「神秘主義（Mysticism）」の章においては、神秘主義は正常な観念の連合からの逸脱状態として論じられている。その中でノルダウは観念の連合の法則として、「同時（Simultaneity）」、「類似（Similarity）」、「対照（Contrast）」、「隣接（Occurrence in the same place（Contiguity））」の四つの原理を提示している。[17]

さらに、モーガン『比較心理学入門（Introduction to Comparative Psychology）』（一八九四）においては、ヒュームによって副次的なものとして扱われた「対照」は、「因果」に代わってむしろ観念の連合の原理の一つとして理解されているのである。

> As the result of such analysis certain laws of association have been formulated. As generally accepted they are two — (1) association by contiguity, and (2) association by similarity; to which, as subsidiary, is sometimes added a third, (3) association by contrast.（下線は漱石による）[18]

漱石は、ヒュームによる「類似」「隣接」「因果」の法則よりもむしろ、モーガンが主張するような、「類似」「隣接」「対照」の三つの原理に「連合の法則」を見出していた。

このことを示す根拠として、イギリス留学中に記したと推定される、"Associative Use of Language（「言語の連合的使用」）"と題された筆記断片を挙げることができる。その断片の一部に次のような記述がある。[19]

association { similarity（shape colour action—motion relation）
contrast
contiguity

○大文学者ハ超絶セル此 associative faculty ノ資格ヲ有ス
（Emerson ノ Representative Men 参考）

（1）shape
（2）colour
（3）action-motion
（4）relation
等ニ分ツヲ得ベシ

又　（1）original, vivid, novel, striking, clear
（2）pathetic, gloomy, melancholy
（3）humorous, ludicrous
（4）affected, forced, conceited

metaphor ハ此 associative faculty ノ一部ナリ
〔この項の欄外に〕〈已レヲ project スルハ personfication ナリ　物ヲ inject スレバ objectification ナリ〉〈implied projection and in. explicit projection and in.　アリ〉
○suggestion ト revival of emotion ヲ得ルハ此 faculty ノ巧妙ナルガ為ナリ.其妙ナル者ハ proverb トシテ存在ス
○ツマリ suggestion 及ビ revival ヲ強クシテ読者ノ emotion ヲ強クスル道具ナリ.ツマリ時トシテハウソヲ means トシテ人ニ真ヲ示シムル技術ナリ手品ナリ科学的説明ハ真ヲ means〔トシテ〕人ガ真ノ如クニハツト感ゼザルナリ
○Winchester〔ガ〕associative imagination ヲ論ズル条ニ下ノ例ヲ挙グ

漱石はこの断片の中で、“association”の法則として、“similarity”, “contrast”, “cotiguity”の三つを挙げた上で、“metaphor”は“associative faculty”に基づくと述べる。漱石はこの断片において、比喩的表現の根底に連合の能力を認めており、この意味で、断片“Associative Use of Language”は『文学論』「第四編　文学的内容の相互関係」の構想と深く関わっていると言って良いだろう。『文学論』第四編において漱石は、まさに、「一種の「観念の聯想」を利用し」、“personification”や“objectification”といった修辞技法の分析を試みているからである。

それでは『文学論』の中で修辞技法の分析と観念の連合の法則とはどのように関わるのだろうか。

三　『文学論』の修辞学

『文学論』第四編では、「一種の幻惑を喚起してそこに文芸上の真を発揮」するための「手段」として、「所謂修辞学」の分析が試みられている。漱石は、「坊間に行はるゝ通俗の修辞学は徒に専断的の分類に力を用ゐ、其根本の主意を等閑視する傾向あればその効著からず」として、[20]「一種の「観念の聯想」を利用し」(262)、文学における修辞技法を改めて整理しようと試みる。

これらの言葉が示すように漱石は、文学言語の特色を修辞に見ており、その修辞は「観念の聯想」を利用するものであると指摘する。漱石が文学言語の本質を修辞技法による比喩的な表現に認め、比喩的表現には観念の連合が深く関与すると認識していたことは、明治三六年九月から明治三八年五月にかけて行われ、『文学論』の基となった漱石の授業“General Conception of Literatur”の中に、より明確に見出すことができる。漱石のこの授業の受講者の一人である金子健二は、受講ノートに漱石の言葉として次のように記している。

文学者ノ本領ハ artistic truth ヲ表ハサントスルニアリ　今此 truth ヲ発揮スル手段ニ付テ述ベントス　此手段ヲ普通吾人ハ rhetoric ト称ス　然レドモ普通ニ所謂 rhetoric ト云ヘバ字引ノ如キモノニシテ arbitrary ニ arrange セシニ過ギズ　故ニ之ヲ読ムトキハ personification 等ノ意義ヲ知レドモ詳シキコトヲ知ル能ハズ　加フルニ不用ノ classification ヲナスコト多シ　例ヘバ synecdoche ノ如シ　即チ genus ヲ individual ニ分ツトカ etc. ノ如シ　要之 artistic truth ヲ示サン為ニ用フル literary language ヲ一言ニテ掩ヘバ一種ノ association of idea ニ帰ス
故ニ普通ノ文学論者ハ文学上用ヒラルゝ言語ヲ論スルニ当リテ之ヲ rhetoric ノ中ニ入ル　然レドモ是所ニテハ association of idea ノ名ノ下ニテ論ゼントス（傍線原文）[21]

漱石はこの授業で、「artistic truth ヲ示サン為ニ用フル literary language ヲ一言ニテ掩ヘバ一種ノ association of idea ニ帰ス」とし、以後、「association of idea ノ名ノ下ニ」、「此 associative language を」分類していくのである。その講義の展開はほぼ『文学論』第四編に等しい。

漱石が分類する修辞技法は、大きく、「投出語法」「投入語法」

心理学などの展開の中で連合の原理を巡って異なる見解が示される場合がある。

例えば、一九世紀末における西洋の文学や芸術を「世紀末的」な退廃現象の現れとして論難したドイツの評論家マックス・ノルダウの著作『退化論（Degeneration）』（原著一八九二、英訳一八九八）の「神秘主義（Mysticism）」の章においては、神秘主義は正常な観念の連合からの逸脱状態として論じられている。その中でノルダウは観念の連合の法則として、「同時（Simultaneity）」、「類似（Similarity）」、「対照（Contrast）」、「隣接（Occurrence in the same place（Contiguity））」の四つの原理を提示している。[17]

さらに、モーガン『比較心理学入門（Introduction to Comparative Psychology）』（一八九四）においては、ヒュームによって副次的なものとして扱われた「対照」は、「因果」に代わってむしろ観念の連合の原理の一つとして理解されているのである。

> As the result of such analysis certain laws of association have been formulated. As generally accepted they are two — (1) association by contiguity, and (2) association by similarity; to which, as subsidiary, is sometimes added a third, (3) association by contrast. （下線は漱石による）[18]

漱石は、ヒュームによる「類似」「隣接」「因果」の法則よりもむしろ、モーガンが主張するような、「類似」「隣接」「対照」の三つの原理に「連合の法則」を見出していた。

このことを示す根拠として、イギリス留学中に記したと推定される、“Associative Use of Language（「言語の連合的使用」）”と題された筆記断片を挙げることができる。その断片の一部に次のような記述がある。[19]

association { similarity（shape colour action—motion relation）
contrast
contiguity

○大文学者ハ超絶セル此 associative faculty ノ資格ヲ有ス
（Emerson ノ Representative Men 参考）

（1）shape
（2）colour
（3）action-motion
（4）relation
等ニ分ツヲ得ベシ

又 （1）original, vivid, novel, striking, clear
（2）pathetic, gloomy, melancholy
（3）humorous, ludicrous
（4）affected, forced, conceited

metaphor ハ此 associative faculty ノ一部ナリ
〔この項の欄外に〕〈己レヲ project スルハ personfication ナリ　物ヲ inject スレバ objectification ナリ〉〈implied projection and in. explicit projection and in.　アリ〉
○suggestion ト revival of emotion ヲ得ルハ此 faculty ノ巧妙ナルガ為ナリ.其妙ナル者ハ proverb トシテ存在ス
○ツマリ suggestion 及ビ revival ヲ強クシテ読者ノ emotion ヲ強クスル道具ナリ.ツマリ時トシテハウソヲ means トシテ人ニ真ヲ示シムル技術ナリ手品ナリ科学的説明ハ真ヲ means〔トシテ〕人ガ真ノ如クニハツト感ゼザルナリ
○Winchester〔ガ〕associative imagination ヲ論ズル条ニ下ノ例ヲ挙グ

漱石はこの断片の中で、“association”の法則として、“similarity”, “contrast”, “cotiguity”の三つを挙げた上で、“metaphor”は“associative faculty”に基づくと述べる。漱石はこの断片において、比喩的表現の根底に連合の能力を認めており、この意味で、断片“Associative Use of Language”は『文学論』「第四編　文学的内容の相互関係」の構想と深く関わっていると言って良いだろう。『文学論』第四編において漱石は、まさに、「一種の「観念の聯想」を利用し」、“personification”や“objectification”といった修辞技法の分析を試みているからである。

それでは『文学論』の中で修辞技法の分析と観念の連合の法則とはどのように関わるのだろうか。

三　『文学論』の修辞学

『文学論』第四編では、「一種の幻惑を喚起してそこに文芸上の真を発揮」するための「手段」として、「所謂修辞学」の分析が試みられている。漱石は、「坊間に行はるゝ通俗の修辞学は徒に専断的の分類に力を用ゐ、其根本の主意を等閑視する傾向あればその効著からず」として、[20]「一種の「観念の聯想」を利用し」（262）、文学における修辞技法を改めて整理しようと試みる。

これらの言葉が示すように漱石は、文学言語の特色を修辞に見ており、その修辞は「観念の聯想」を利用するものであると指摘する。漱石が文学言語の本質を修辞技法による比喩的な表現に認め、比喩的表現には観念の連合が深く関与すると認識していたことは、明治三六年九月から明治三八年五月にかけて行われ、『文学論』の基となった漱石の授業“General Conception of Literatur”の中に、より明確に見出すことができる。漱石のこの授業の受講者の一人である金子健二は、受講ノートに漱石の言葉として次のように記している。

文学者ノ本領ハ artistic truth ヲ表ハサントスルニアリ　今此 truth ヲ発揮スル手段ニ付テ述ベントス　此手段ヲ普通吾人ハ rhetoric ト称ス　然レドモ普通ニ所謂 rhetoric ト云ヘバ字引ノ如キモノニシテ arbitrary ニ arrange セシニ過ギズ　故ニ之ヲ読ムトキハ personification 等ノ意義ヲ知レドモ詳シキコトヲ知ル能ハズ　加フルニ不用ノ classification ヲナスコト多シ　例ヘバ synecdoche ノ如シ　即チ genus ヲ individual ニ分ツトカ etc. ノ如シ　要之 artistic truth ヲ示サン為ニ用フル literary language ヲ一言ニテ掩ヘバ一種ノ association of idea ニ帰ス
故ニ普通ノ文学論者ハ文学上用ヒラルゝ言語ヲ論スルニ当リテ之ヲ rhetoric ノ中ニ入ル　然レドモ是所ニテハ association of idea ノ名ノ下ニテ論ゼントス（傍線原文）[21]

漱石はこの授業で、「artistic truth ヲ示サン為ニ用フル literary language ヲ一言ニテ掩ヘバ一種ノ association of idea ニ帰ス」とし、以後、「association of idea ノ名ノ下ニ」、「此 associative language を」分類していくのである。その講義の展開はほぼ『文学論』第四編に等しい。

漱石が分類する修辞技法は、大きく、「投出語法」「投入語法」

「自己と隔離せる聯想」「滑稽的聯想」「調和法」「対置法」の六種に分類される。

漱石によれば、「投出語法」とは、「自己を投出（project）して外界を説明する手段を意味するものにして所謂擬人法又はprosopopoeia等は此内に含まれるべきもの」（263）であり、他方、「投入語法」とは、「自己を解くに物を以てする種類の聯想」（274）、「畢竟人類の行為、状態の印象を明晰ならしむるため、外物を投入し来るの意」（277）である。両者は自己と外界の事物との関係に基づく比喩表現と言えるが、これに対し「自己と隔離せる聯想」は、「全く自己なるものを離れたる外物間の聯想」（281）、「外界の一物を説明するに、外界の一物を以てする手段」（282）である。これらの「投出語法」「投入語法」「自己と隔離せる聯想」は、「二個の材料」の「共通性」や「両者間の類似」（296）に基づき、二つの文学的材料を結び付ける修辞技法である。そして、以上の三種の技法は、「もし之を委却すれば文学は決して存在し得べからず」（292）と言われる程、文学においてもっとも根本的な言語の使用法とされる。

「滑稽的聯想」は、「多少の共通性を利用するの結果、之を通じて思ひも寄らぬ両者を首尾よく、繋ぎ合せたる手際を目的となすもの」（296）とされ、同時に、「ある共通性の助に由り意外の二物を連結して、其差異を対照するを主眼とする」（332）。「滑稽的聯想」はより具体的には、言語の音の類似に基づく「口合（pun）」と、知力に訴えて滑稽感を醸し出す「頓才」とに分類される。

「調和法」は、「投出語法」「投入語法」「自己と隔離せる聯想」の「拡張」（312）あるいは「変体」（352）として、一方「対置法」は、「類似の連鎖を通じて非類似のものを聯想する」「滑稽的聯想」の「布衍」（312）または「拡大」（352）として論じられている。

「調和法」は、「aの文学的効力を強大ならしむる為めに単にbを配置」（312）する技法であり、ここで重要なのは、二個以上の文学的材料の喚起する感情が「調和近似を必要とする」（321）点である。一方「対置法」は大きく三つに下位分類され、「異種殊に反対のfを配合する」（332）ことによって「第一種はaのfを和ぐるにbのfを以てするもの。第二種は対置の結果（即ち感興）自から調和の結果と一致するもの、第三種は前述第四聯想法に似て、多少の滑稽趣味を帯ぶるもの」（333～3334）と定義され、それぞれは「緩勢法」「強勢法」「不対法」と名付けられている。さらに「対置の形式を具へて却って調和の用をなす」（353）技法として「仮対法」が付加される。

漱石によるこのような修辞技法の分類を観念の連合の法則によって捉え返す時、次のように纏めることが可能だろう。「投出語法」「投入語法」「自己と隔離せる聯想」「調和法」は「類似」の原理に基づき、一方、「滑稽的聯想」および「対置法」は、「類似」および「対照」の原理の両者に基づく。ただし「対照」の原理は、漱石においては、最終的には「類似」の原理に包摂されるものとして理解されており、漱石は修辞技法を分類するに当り、観念の連合の法則における「類似」の原理をもっとも基本的な原理として見なしていたと言える。漱石は次のように述べる。

調和法の対置法に於るは第一、二、三種聯想法の第四種聯想法に於けるに似たり。第一、二、三が第四と共に両素間の共通性を待つて成立するが如く、調和法と対置法も亦極めて接近するところなきにあらず、否或る意義より云へば後者を以つて前者の一局面と見做すさへ不容易にあらず。仮に調和に階段を設くればその一端は全然同じき二物の配合にして、他端は全然異れる二物の連結ならざるべからず。対置は即ちこの一端を意味するものにして、云はば消極の調和なり。（中略）而して対置法は此極端の調和に過ぎず。此故に対置法と調和法とは其間に顕著なる境界あるにもかゝわらず、根本に遡れば其区分曖昧たるものあるを免れず。（332～333）

ここでは漱石は、「仮に調和に階段を設くればその一端は全然同じき二物の配合にして、他端は全然異れる二物の連結ならざるべからず。対置は即ちこの一端を意味するものにして、いはば消極の調和なり」と述べており、「対照」とは「類似」の階梯における零度の「調和」として認識されていると言って良いだろう。このように漱石は、比喩的表現を生み出す観念の連合の機構は、最終的には、「類似」の原理に収斂すると見なしていたと言えるのである。[22]

しかし、「類似」の原理に基づいて比喩的表現を文学言語の特質と見なすことは、『文学論』にのみ固有な、独自な見解とは必ずしも言えないだろう。例えばジェラール・ジュネットは、古代ギリシアにおけるアリストテレスの『弁論術』の中では広大な修辞学の領域の一分野を占めるに過ぎなかった「文彩の理論」が、一八世紀以降のフランスにおいては修辞学思想の中心的な位置を占めるようになり、さらにはその「文彩の理論」は「転義論への縮訳化」へと進み、修辞学の対象が限定されたと主張する。さらにジュネットによれば、転義論へと限定された近代的な修辞学の中でも支配的な位置を占めるのが「類似性」に基づく隠喩であるという。ジュネットは、「隠喩という術語はしだいに類比の領域の総体を覆いつくす傾向にある」「唯一隠喩のみが、修辞学の――もしくは修辞学の中で我々に残されているものの――核心に、位置を占めてゆくことになる」と指摘する。[23]

このように西洋の近代的な修辞学の中では隠喩が特権的なものとして扱われているのであり、その意味では文学言語の特質を「類似」の原理に基づく比喩的表現にあると見なす漱石の『文学論』もまた、近代的な西洋修辞学の発想の範疇にあると言って良いだろう。

しかし、それでは『文学論』の固有性はいったい何処にあると言えるのだろうか。

四　『文学論』における「写実法」の意義

漱石は、『文学論』第四編第七章において「写実法」を取り上げ、比喩的表現と対置させている。漱石は「写実法」について次のように主張する。

（注――Milton, *Paradise Lost* から "The brazen throat of war had ceased to roar." の一節を引用した上で）是大胆なる詩的の語なり。詩的と云ふのは曖昧なるを厭ひて余一家の述語を用

ゆれば聯想法中の投出語なり。（中略）然れども詩的の語は遂に詩的の語なり。一定の思索的労力を経て始めて成るの点に於て、之を自然の語と云ふべからず。（中略）もし一人あつて現実社会の表現を眼前に活動せしめんとせば、勢是等の語法より得る便宜を犠牲に供して、自然に吾人の耳に入る表現法（平凡なるにも関せず）を用ゐざる可からず。之を写実法と云ふ。

（364）

漱石は「観念の聯想」に基づく「詩的の語」と対比した上で、「写実法」を「自然の語」に基づく表現法、「自然に吾人の耳に入る表現法」、さらに「巧拙を云々すべき技巧なきにちかきもの」「純乎として無芸の表現」（369）などと指摘する。しかし、漱石がこのように位置付ける「写実法」に対し吉田精一は、「ふつうの文章修飾の形式を論じる修辞学が、写実論を除外する場合と、おもむきをことにする」として、次のような疑義を呈している。

写実法もまた、あたえらた材料を如何に表現すれば写実法で、その効果はどこにあるかを主眼として処理されている。この点、ふつうの文章修飾の形式を論じる修辞学が、写実論を除外する場合と、おもむきをことにするが、しかしさすがの漱石としても写実法を「観念の連想」に基礎をもとめて他の諸法たる擬人法（投入語法の一）や直喩（自己を隔離せる連想）と同一範疇におさめるには苦しんだ気配がある。[21]

確かに吉田が指摘するように、「文章修飾の形式」を排し「自然の語」に基づく「写実法」は、言語を技巧的に使用する修辞の発想とは相容れないだろう。しかし、『文学論』における漱石の意図はあくまでも「写実法」を修辞の範疇において捉え直すことにあったことは確かであるように思われる。なぜなら漱石は、「写実法はこの際文学的手段の一として、前段の連続するものに外ならざるを以て、同じくこの型中にその意義を限らざるをべからず。即ち与へられたる材料を如何に表現せば写実法にしてその効果は果して如何との問題を解決するを以て一章の主眼とす」（363～364）、「吾人は詩人の建立せる蓬莱に入り、画家の創造せる桃源に遊んで陶然たる幻惑を受くるを辞せざると共に、わが親しく見聞せる日常生活の局部が其儘眼前に揺曳して写実的幻惑中に吾人を担ひ去るを快とす」（366）などと述べ「写実法」が「文学的手段の一」っであることを繰り返し主張しているからである。

このように「写実法」を修辞の一範疇において捉え返そうとする『文学論』の試みから言えば、「写実法」とは単に技巧を排除することや無芸の表現を意味するのではなく、技巧が介在しないかのように自然に見せる技巧であったと言えるだろう。つまり、『文学論』における「写実法」とは、観念の連合に基づく「詩的の語」が「詩的幻惑」を発揮するのと全く同じように、「自然の語」「自然に吾人の耳に入る表現」によって「写実的幻惑」という修辞的効果を発揮する「文学的手段」として捉えられているように思われるのである。

従って『文学論』では「一種の幻惑を喚起してそこに文芸上の真を発揮」するための文学言語として、「詩的幻惑」をもたらす「詩

的の語」と「写実的幻惑」を発揮する「自然の語」との二類型が想定されていると言えるだろう。[25] そして、『文学論』の修辞学の固有性とは、「詩的の語」と並んで「自然の語」を修辞の観点から捉え返し、「ふつうの文章修飾の形式を論じる修辞学」の範疇を拡張しようと試みた点にあったと言えるように思われる。

このような「詩的幻惑」と「写実的幻惑」をともに「文芸上の真」として等しく捉えていこうとする漱石の発想は、例えば後年の「田山花袋君に答ふ」(『国民新聞』明治四一年一一月七日)にも通底する見方であると言って良いだろう。

> 拵へものを苦にせらるゝよりも、活きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を拵へる方を苦心したら、どうだらう。拵へた人間が活きてゐるとしか思へなくつて、拵へた脚色が自然としか思へぬならば、拵へた作者は一種のクリエーターである。拵へた事を誇りと心得る方が当然である。[26]

漱石のこの発言は、『趣味』(第三巻第一一号、明治四一年一一月号)に掲載された花袋の「評論の評論」を受け、反論を試みたものである。花袋は「評論の評論」において、漱石がズーダーマンの『カツェッエンステツヒ(猫橋)』に「ひどく感服して居」る点を取り上げ、しかし、ズーダーマンの作品は「全篇唯是れ作為の跡のみである」「作者の拵え者である」「自然的のものを写したと云ふ趣は極めて少い」とし、「拵へもの」に過ぎないズーダーマンの作品を高く評価する漱石の文学的な認識の遅れを批判していた。漱石はこのような花袋の批判に、「拵へもの」に「自然としか思へぬ脚色」を付与する「クリエーター」としての技巧の重要性を対置したのである。[27]

このような漱石と花袋の論争の背景には、「文芸上の真」を発揮するための「文学的手段」を巡る両者の認識の相違があると言って良いだろう。

永井聖剛によれば、明治三〇年代における花袋の文体上の試みは、「見立て」に基づく「隠喩的な認識」から「換喩的な認識」への移行・転換として捉えることができるという。[28] 永井が指摘するこのような花袋の試みは、『文学論』の修辞学の観点から言えば、「自然の語」による「詩的の語」=「拵へもの」の除外として理解することが可能だろう。「評論の評論」における漱石への批判の根底にあるのも、「文芸上の真」を発揮する技巧としての「詩的の語」=「拵へもの」を認めまいとする花袋の姿勢である。従って、ズーダーマンの評価を巡る漱石と花袋の対立の基底にあるのは、「詩的の語」と「自然の語」とを断絶させ、「文芸上の真」から「詩的の語」を除外しようと試みる花袋と、「活きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色」の背後に技巧の介在を認め、「文芸上の真」を「詩的の語」と「自然の語」との連続的な位相の下に捉えようと試みる漱石との、「文学的手段」に対する認識の差であると言って良いだろう。

しかし、このような対立の前提にあるのはもちろん、「文芸上の真」を発揮するための「文学的手段」の追求を重要な課題と認識する漱石と花袋との共通性である。その意味では『文学論』第四編に

おける漱石の修辞学は、花袋に代表される同時代的な問題意識と深く交錯する試みであったと言えるだろう。同時に、「詩的の語」と「自然の語」とを等しく「文芸上の真」を発揮するための「文学的手段」として捉えようと試みる『文学論』は、まさにその点において固有性を示していることもまた明らかだろうと思われる。

おわりに

本稿では、漱石の蔵書や筆記断片などの周辺資料を参照し、漱石の連合主義への関心を確認してきた。漱石の連合主義への関心の焦点は観念の連合の法則にあり、漱石によって「類似」「対照」「隣接」として捉えられたその法則は、「類似」の原理を中心に再編され、「詩的の語」に基づく比喩的表現を文学言語の特質の一つと主張する『文学論』第四編に理論的基盤を与えていた。

しかし、このような認識は必ずしも『文学論』の独創とは言えない。『文学論』の独自性とはむしろ「詩的の語」と「自然の語」とを共に「文芸上の真」を発揮するための文学言語として捉え返そうとする点にあり、そのことによって修辞の概念を拡張しようと試みた点にある。このような『文学論』の修辞学はまた、「文芸上の真」を発揮する「文学的手段」を追求する同時代的な問題意識とも地平を同じくすると言えるだろう。

本稿では詳細を論じることはできないが、これまでも既に多くの指摘があるように心理学理論や連合主義に基づく修辞技法の分析は同時代の修辞学書と理論的な枠組みを共有する。[29] さらに『文学論』は、趣味判断（Taste）、天才（Genius）、崇高（Sublime）などへの関心を示しており、同時代の修辞学書のみならず美文や小説の作法書などと共振する点が少なくない。このような同時代的なテクストの連関の中に位置付けることによって『文学論』の固有性が更に明らかになるだろう。

（注）

（1）江藤淳「神経衰弱と文学論」（『決定版　夏目漱石』新潮文庫、一九七九・七、四七頁）。

（2）柄谷行人「風景の発見」（『増補　漱石論集成』平凡社ライブラリー、二〇〇一・八、一七八頁。初出『季刊藝術』一九七八年夏号）。

（3）「新心理学（New Psychology）」とは、アメリカの心理学者エドワード・スクリプチャーの著書のタイトルである。この書物は漱石の蔵書に含まれており、その中でスクリプチャーは近年の心理学の特徴として、「実験的および医学的な方法によって組織化された観察がもたらされた（the introduction of systematised observation, by means of experimental and clinical methods）」点を挙げている（E.W. Scripture, *The New Psychology*（London: Walter Scott, 1897）, pp.1-2）. 本稿では、自然科学的な方法に基づき、一九世紀半ばから二〇世紀初頭にかけて発達した心理学全般を、「新心理学」と総称することとしたい。

（4）波多野完治『国語文章論』（国語科学講座第九巻、明治書院、一九三三・一二、一一～一五頁）。

(5) 太田三郎「漱石の文学観の一面—スペンサー哲学との交渉」(『明治大正文学研究』第六号、東京堂、一九五一・一一)。

(6) 塚本利明「『文学論』の比較文学的研究—その発想法について」(『日本文学』第一六巻五号、一九六七・五)。

(7) Howard C. Warren, *A History of the Association Psychology* (New York: Charles Scribners's Sons, 1920), pp. 6-7.

(8) George F. Stout, "Association (of Ideas)", *Dictionary of Philosophy and Psychology* vol. I, ed. by James Mark Baldwin (New York: Macmillan, 1901).

(9) C. Delisle Burns, *The Growth of Modern Philosophy* (London: Sampton Low, Marston & Company, 1909), p. 60. ただし本書は、『文学論』刊行後の出版である。(漱石文庫蔵)

(10) 前掲注(9) Burns, p. 65.

(11) Wilhelm Wundt, *Outlines of Psychology*, Second Revised English Edition, trns. by Charles Hubbard Judd (London: Williams & Norage, 1902), pp. 245-246. (漱石文庫蔵)

(12) ジェームズ『心理学原理』「第一六章　連合」には次のような記述があり、漱石は"Association, so far as…"以下を大きく線で囲っている。

But the whole historic doctrine of psychological association is tained with one huge error—that of the construction of our thoughts out of the compounding of themselves togther of immutable and incessantly recurring 'simple ideas.' It is the cohesion of these which the 'principles of association' are considered to account for. In Chapters VI and IX we saw abundant reasons for treating the doctrine of simple ideas or psychic atoms as mythological; and, in all that follows, our problem will be to keep whatever truths the associationist doctrine has caught sight of without weighing it down with the untenable incumbrance that the association is between 'ideas.'

Association, so far as the word stands for an effect, is between THINGS THOUGHT OF—it is THING, *not ideas, which are associated in the mind.* We ought to talk of the association of objects, not of the association of ideas. And so far as association stands for a cause, it is between processes in the brain—it is these which, by being associated in certain ways, determin what successive objects shall be thought. Let us proceed towrdfs our final generalization by surveying first a few familiar facts. (William James, *The Principles of Psychology*, vol. II (London: Macmillan, 1901), pp. 553-554). (漱石文庫蔵)

(13) リボー『創造的想像力に関する試論』には次のような記述があり、漱石は"association"および"association of ideas"などに下線を施している。なお刊行年から明らかなように、漱石がこの書籍を入手したのは、英国留学からの帰国後である。

Association is one of the big questions of psychology; but

as it does not especially concern our subject, it will discussed in strict proportion to its use here. Nothing is easier than limiting ourselves. Our task is reducible to a very clear and very brief question: What are the forms of association that give rise to new combinations and under what influenses do they arise? All other forms of association, those that are only repetitions, should be eliminated. Consequently, this subject can not be treated in one single effort; it must be studied, in turn, in its relations to our three factors—intellectual, emotional, unconscious.

It is generally admitted that expression "association of ideas" is faulty. It is not comprehensive enough, association being active also in psychic states other than ideas. It seems indicative rather of mere juxtaposition, whereas associated states modify one another by the very fact of their being connected. But, as it has been confirmed by long usage, it would be difficult to eliminate the phrase.

On the other hand, psychologists are not at all agreed as regards the determination of the principal laws or forms of association. Without taking sides in the debate, I adopt the most generally accepted classification, the one most suitable for our subject—the one that reduces everything to the two fundamental laws of contiguity and resemblance. In recent years various attempts have been made to reduce these two laws to one, some reducing resemblance to contiguity; others contiguity to resemblance. Putting aside the ground of this disscussion, which seems to me very useless, and which perhaps is due to excessive zeal for unity, we must nevertheless recognize that this disscussion is not without interest for the study of the creative imagination, because it has well shown that each of the fundmental laws has characteristic mechanism. (Th. Ribot, *Essays on the Creative Imagination*, trns. by Albert H. N. Baron (Chicago: The Open Court Publishing, 1906), p. 23). (漱石文庫蔵)

(14) 連合の概念の適用は、心理学・文学・美学など広範囲に及ぶ。漱石は、コールリッジの散文集に収められた「詩情あるいは芸術について」(S. T. Coleridge, 'On Poesy or Art', *Passages from the Prose and Table Talk of Coleridge* (London: Scott, 1894))や、西洋美学の概説書であるウィリアム・ナイト『美の歴史』(William Knight, *The Philosophy of Beautiful*, vol.1 (London: John Murray, 1895))などにおいても、連合の概念に注目している。

(15) 前掲注(7) Warren, p.43.

(16) David Hume, *Concerning Human Understanding*, ed. by T. H. Green and T. H. Groos, Essays Moral, Political, and Literary, vol. II (London: Longmans, Green, 1882), p.18. (漱石文庫蔵)

(17) Max Nordau, *Degeneration* (London: William Heinemann,

1898), pp.49-50.（漱石文庫蔵）

(18) C.Lloyd Morgan, *An Introduction to Comparative Psychology* (London: Walter Scott, 1894), p.71.（漱石文庫蔵）

(19)『漱石全集』（第二一巻、岩波書店、一九九七・六、三五三～三五四頁）。

(20) 漱石が、「徒に専断的の分類に力を用ゐ」たとして批判する修辞学書として、島村瀧太郎（抱月）が東京専門学校で行った講義録である『新美辞学』（一九〇二）や、五十嵐力が早稲田大学で行った講義を基にした『文章講和』（一九〇五）や『新文章講話』（一九〇九）などを想定することが可能かもしれない。例えば抱月は『美辞学』の中で「詞藻」を「類似」「聯接」「照繳」「雑種」の四種に分類した上でさらに下位の分類を設定し、計二三種の分類を行っている。さらに、五十嵐力は『新文章講話』では六〇種を超える「詞姿」に分類している。

(21) 金子三郎編『記録　東京帝大一学生の聴講ノート』（リーブ企画、二〇〇二・三、三八六頁）。なお引用にあたり、文の切れ目にスペースを補った。

(22) 漱石が「類似」の法則を修辞の基本的な原理と見なしていたことは、前掲注（六）において塚本が既に指摘している。また三宅雅明には、「漱石が、とくに投出語法と投入語法の表現効果を力説しているところからみて、メタファーを本質的な文学言語としてとらえていた」との指摘がある（「漱石『文学論』の現代的意義―記号学の視座から」『大阪府立大学紀要　人文・社会科学』第三四巻、一九八六・三）。

(23) ジェラール・ジュネット「限定された修辞学」（花輪光監修『フィギュールⅢ』書肆風の薔薇、一九八七・四、五七頁、六七頁）。

(24) 吉田精一「夏目漱石の文芸理論」（江藤淳・吉田精一編『漱石文学案内』夏目漱石全集別巻、角川書店、一九七五・二、九五頁）。

(25) このような「詩的の語」と「自然の語」との対比は、例えば、言語学者ロマーン・ヤーコブソンによる失語症の症例分析に基づく修辞の二類型に近似しているように思われる。ヤーコブソンもまた修辞を観念の連合の法則の観点から捉えており、メタファー（隠喩）は「類似」の原理に、メトニミー（換喩）は「隣接」の原理に基づくと指摘する。さらにヤーコブソンは修辞の二類型を文学ジャンルの分類とも対応させており、メタファー型の表現には典型的にはロマン主義・象徴主義の作品が属し、メトニミー型の表現には叙事詩や写実主義の小説などが該当すると主張する（ロマーン・ヤーコブソン「言語の二つの側面と失語症の二つのタイプ」『一般言語学』みすず書房、一九七三・三）。

(26)『漱石全集』（第一六巻、岩波書店、一九九五・四、二五五頁）。

(27)「文芸上の真」を発揮するための「道具」としての「技巧」の重要性は、朝日新聞社入社直後に東京美術学校で行われた講演「文芸の哲学的基礎」（『東京朝日新聞』明治四〇年五月

四日〜六月四日）においても指摘されている。漱石は「現代文芸の理想」は「真の一字にあるに相違ない」とした上で、「近頃日本の文学者のある人々は技巧は無用だとしきりに主張するさうですが、（中略）文芸家である以上は、技巧はどうしても捨てる訳には、参るまいと信じます」と述べている（前掲注（26）一〇三〜一〇四、一二五頁）。

（28）永井聖剛「無技巧の修辞学的考察―田山花袋の文体練習と修辞学の動向をめぐって」（『自然主義のレトリック』双文社、二〇〇八・一〇。初出『愛知淑徳大学論集（文化創造学部篇）』第六号、二〇〇六・三）。

（29）心理学者の波多野完治は、前掲注（4）の中で、イギリスの心理学者アレクサンダー・ベイン、同じくイギリスの心理学者・社会学者ハーバート・スペンサー、フランスの心理学者リボーといったような、「文の表現価値の心理学的解明」「修辞技法の心理学的解明」の流れを汲む日本における試みとして、坪内雄蔵（逍遥）『美辞論稿』（一八九三）、島村瀧太郎（抱月）『新美辞學』（一九〇二）、五十嵐力『新文章講和』（一九〇九）とともに、漱石の『文学論』および、『英文学形式論』を挙げる。吉田精一もまた前掲注（24）の中で『文学論』第四編について、「これはふつう修辞学の部門に入り、作品あるいは文章の形式面に属する」と指摘し、同じ試みとして、やはり島村抱月の『新美辞学』、および五十嵐力『文章講話』などを挙げ、「これらは何れもイギリスの修辞論に根拠を得て、日本の詩歌文章に実例をもとめたもの」と指摘する。さらに修辞学書と小説理論の関連では、亀井秀雄は『小説神髄』（一八八五）について、「大ざっぱに言って、上巻は小説原論的な理論編、下巻は小説の書き方に関する作法書と見ることができる」とし、「原理編と応用編という構成の仕方は、おそらく修辞書からヒントを得たものであった」と指摘する（『小説論』岩波書店、一九九九・九、二頁）。

※『文学論』の引用は、『漱石全集』（第一四巻、岩波書店、一九九五・八）に拠り、適宜、ルビ等を省略した。引用にあたっては頁数を付記した。

（東北大学大学院文学研究科前期課程在籍）